

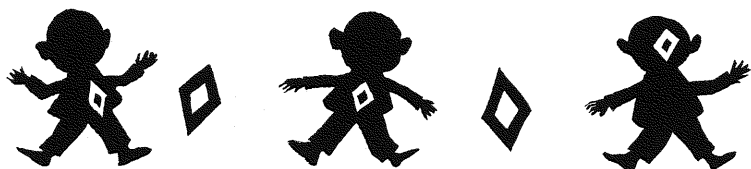


## 巻頭言

# もうひとつの子育て支援

友定 啓子

私どもの幼稚園では、保護者が保護者として成長していくことを願って、保護者サポートシステムをつくった。昨今の育ちそびれの子どもを引き受けて、ただでさえたいへんなところへ、親をも支えるということになれば、保育者の負担が増えてたいへんである。しかし、それに応えるかのように親たちが幼稚園をサポートするようになって、園全体がパワフルになってきた。親が加わることで保育内容も充実できるし、園運営の一翼を自分たちになうという思いまで感じられて、力強い応援団になっている。



私どもが支えることのできる保護者の成長とは、まずひとつは子ども理解・幼児理解を深めること、次に幼稚園教育に対する理解を深めること、そして最後に自身自身のある方々を考慮することの三つである。その際に重視したいことは、園が保護者を「教える」のではなく、保護者自身が「なすこと」によって学び、自ら成長していく」ことである。

具体的な活動としては、おたよりや講話など園から保護者へのさまざまな発信、懇談・相談など保育者との日常的な対話、講演や茶話会などの専門家との学習機会、保護者の保育参加や保育体験の保障などである。これらは特に目新しいメニューではないのだが、私どもは事前の準備やあとのフォローを含めてこれらをプログラムとして系統的に行う。保護者の不安や期待・学習要求は、子どもの状態によって変化していく。それに合わせて入園から卒園まで、これらの諸活動を時系列に沿って組み合わせている。すべての親が対象となるものもあれば希望者だけのものもある。これにPTAのメニューも入り、親はけっこう忙しい。

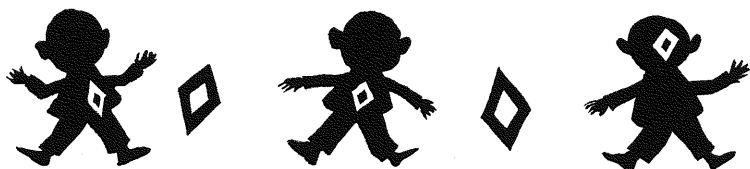
入園の頃は、親も子ども不安で多くの支援が必要だ。この時期は自分の子どものことで精一杯だ。しかし、保育参加を重ね年長児にもなれば、親は自分の子どもだけでなく多くの子どもが見えるようになり、保育のねらいを理解して、保育者の補助もできるようになる。子どもが成長するように親も成長する。私たち保育者も、親



の成長を見通したかわりができるようになってきた。もちろん個々の場面では苦しいこともあるが、長いスパンを通してみれば確実に変化することもわかってきた。

保育参加とは、親が保育の一日に参加することである。一日に二、五人、すべての親が学期に一度経験する。保育参加期間が一週間程度設定される。「保育参加ガイド」をもとに、事前にオリエンテーションも行うが、基本的には幼稚園を楽しんでほしいと伝える。いっしょに遊び、園生活を知り、園の中で自分の子どもや他の子どもの姿を見、保育にじかに触れてもらうことを目標としている。終わった後は参加者と保育者でミーティングを行う。そこでその日に見たこと感じたこと心配なことを話し合う。この話し合いが考えるきっかけになり、親もだんだんに変化していく。もちろん、園の中に入ることによってさらに心配なことも出てきたり、注文も出てくる。たとえトラブルが起ころうと、それを次の成長につなげていこうと考えている。

この保育参加を経て、子どもが年長児になったときには、親はもうクラスや同学年の子どもを知っている。年長児には、保育者だけではできないスケールの大きい活動を用意している。それに親が保育アシスタントとして役割を持って参加する。事前に保育者がある日の保育のねらいを具体的に説明しておく。畑作り、稲刈り、



野遊び、沢遊びなどの系統的な野外保育、ホットケーキやカレーを作る活動など、大人の目と手がたっぷりあることで安全にいてねいに指導ができるものに入ってもらう。子どもたちも自分の親だけでなく友達の前にも親しみをもち信頼を抱く。親もいっしょに一日を過ごしたという実感が残る。親の自己実現にもなり、保育について理解がいっそう深まり、自分のかかわり方をふりかえる機会にもなる。親はアシスタントノートに感じたことを書き、それが誌面での交流にもなる。保育参加やアシスタントは親だけでなく子どもたちの楽しみでもある。入園の頃、わが子といっしょに不安に揺れていた親が、学年が終わる頃や卒園の頃、「子どもたちの成長」を自分で実感することができてよかったという感想がたくさん出る。

子育て支援の重要性はあちこちで言われている。昨今の親の「子育て負担感」の内容は量的な側面だけでなく、質的な側面があることを見逃さないでいきたい。それは保育の肩代わりだけでは解消できない。それだけではますます子どもは心理的に放っておかれる。幼稚園の親だけでなくすべての親が、多くの子どもに触れ、専門家の助けを借りて子どもを理解するための力をつける場が必要だと私は思っている。子どもが育ち親も育ち、幸せな幼児期を創る子育て共同体に幼稚園や保育所はなれると思う。保育者がその中心的な担い手になり同時に育つ。たいへんだけれども、避けて通れない課題でもある。

(山口大学)